

中学三年生、十五歳。人生の中で一番キラキラとした時間。それは二文字で「青春」と呼ばれます。勉強や部活、そして恋愛に明け暮れる日々。それが「青春」という言葉の定義なら、私は青春のすべてを味わうことはできません。

小さい頃、自分が何者なのか悩んでいた時期がありました。「男」「女」という考え方が自分には当てはまらない。友達が好きな子の話をしてるときは、なんとなく話を合わせる。なんで、私は他の子と違うのだろう。そう何度も疑問に思っていました。

小学四年生の夏、母と一緒に東京へ出かけた時のことです。代々木公園の近くの車道を沢山の人たちが歩いているのを見ました。私が偶然見かけたのは「二〇一八年東京レインボー・プライド」。性的マイノリティを含めたすべての人が、「自分の自分らしい生き方」を訴えるパレードでした。あの時の驚きと感動は四年たった今でも、忘れることはできません。

それから家に帰り、性的マイノリティについて調べました。LGBTQといった今まで見たことがなかった文字がそこには沢山載っていました。その時、自分の性を診断するテストの結果として出てきたのが「×ジェンダー」。私は他人に対して恋愛感情を抱くことがないアセクシュアルにも当てはまりません。今まで、「男性か女性、二種類の選択肢しか存在しない」そう思っていた私にとって「男性と女性が混在する」という考え方は初めてでした。ですが、自分が×ジェンダーだと知ったことで、不思議とそれまで抱え込んでいた心の中の霧が晴れた気がしたのです。

それでも、私は自分が×ジェンダーであるということを誰にも伝えることはできませんでした。私がカミングアウトすることで、周りにいる大切な人が離れていってしまうことが怖かったのです。ですが、一緒に過ごしてきた人達を信じ、カミングアウトしました。その後、みんなの対応が変わることはありませんでした。そしてあるとき、ある友人が私にこう、声をかけてくれました。

「私は丹治が『丹治心』っていう友達として大好きだから。」

その友人は、今でも、私のことを一人の友達として何の偏見も持たず、接してくれています。私は、何より「特別扱いをされなかった」ということが本当に嬉しかったのです。

私の過ごす世界では男女の区別なく、皆、平等に生活していると感じています。では、大人の世界はどうでしょうか。今、世界は「性的マイノリティを認めよう」という風潮に変化しています。日本もその一例です。しかし、そのゴールは本当の「平等」ではないと思います。「認める」という言葉は、上下関係のニュアンスを含んでいるように感じられるからです。「認める」という意識をすることなく、お互いを受け入れ合うことが、本当の「平等」だと私は思うのです。

現在、性的マイノリティに当てはまる人は十一人に一人、左利きと同じくらいの確率で今を生きています。あなた自身が「性的マイノリティは特別な存在ではない」と知ることで、その人らしく生きていける、真の「平等」な世界が、自然とできていくのです。

この主張が、「性別」という窮屈な箱を壊す、きっかけになることを願います。

恋愛がなくても、私は今のありのままでもいられる生活が大好きです。私にとっての青春を、今、謳歌しているのです。だからこそ、私は伝えたい。「許可」ではなく「受容」を。「特権」ではなく「平等」を。